# 本校の研究について

## 1　研究主題

持続可能な社会の創り手を育てる社会科学習

## 2　研究主題の設定理由

（1）今日の社会的課題

私たちが生きている現代は、インターネットの爆発的な普及により、今や誰もが大量の情報を簡単に手に入れることができる時代となった。子どもたち自身も昨年度よりタブレットが「１人１台」となり、インターネットを使って調べればすぐにわかることが増えた。しかしながらその反面、情報が簡単に手に入るようになったため、その情報を鵜呑みにしてしまい、自分で「考える」機会がこれまで以上になくなってきた。また、現代社会に目を向けてみると、これまで利益や利便性を追求してきた結果、環境汚染や南北問題などの課題を多く抱えており、研究主題にもあるように「持続可能な社会」の実現が求められている。この変化の時代に「持続可能な社会の創り手」として、自分のことばかりではなく、周りに目を向け、考え続けることができる子どもを育てることが必要であると考えた。

（2）本校の子どもたちの実態

本校は熊本市の中心に位置し、保護者や地域の教育への関心も非常に高い。全国学力学習状況調査や熊本市学力検査等を見ても、ほとんどの教科において、全国平均や熊本市平均を上回っている。素直で何事にも熱心に取り組む姿もたくさんの場面で見ることができる。その反面、自分の思いを伝える子どもが少なく、日々の授業においても、一部の子どもたちの発言で授業が展開しているように感じている。そのため、わからないことを「わからない」と言い出したり、自分の考えを持っているのだが自信を持って発言することができなかったりして、その場をやり過ごす子どもたちの姿も見られる。そのような子どもたちも自信を持って発言できるためにも、「多様性を認める」学級集団の形成を目指していきたい。

（3）本校の研究の流れ

一昨年度より、『各教科の本質に迫る「主体的・対話的で深い学びの姿」を目指して』の研究テーマのもと、「主体的・対話的で深い学び」の研究の流れを受けながら、すべての教科・領域で研究を進めてきた。

これまでの研究の視点として定めていた「課題設定の工夫」「対話の工夫」「振り返りの工夫」は、どれも主体的・対話的で深い学びの姿を目指すために、重要な視点である。

そこで、昨年度までの研究を踏まえ、今年度は社会科の授業を研究の中心に据え、これらの視点をより深め、研究主題にもある「持続可能な社会の創り手」を育てていきたい。

## 3　研究主題について

（1）「持続可能な社会の創り手」とは

簡単に情報が手に入り且つ、大量の情報で溢れている現代社会では、人々の在り方や考え方も多様化してきている。しかし、少数が多数に飲み込まれ、少数の立場

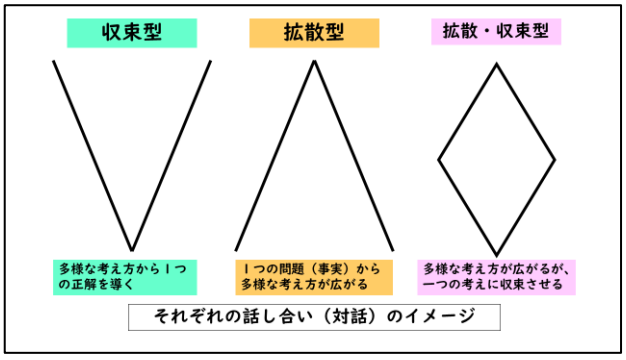
の人がなかなか声を上げることができない現状も見られる。これでは社会の変化に対応し「持続可能な社会」を創っていくことは困難である。前述したような、本校での一部の子どもたちの発言で授業が進んでいるケースが多いという実態と似ている。発言する子どもの考えとは違うと思っていても、「自分の考えの方が間違っているんじゃないか」と考え、発言することができないのである。一見子どもが発言しているように見えるが、実は教師の都合に沿った展開となり、子どもたちの学びの深まりは見られない。

では、どうしたらこれまで発言できなかった子どもたちが発言するようになるのか。それは自分とは異なる考え、つまり多様な考えを認める教室の風土を作っていくことである。

社会科は算数のように「正解」を求めるのではなく、さまざまな「解」を考える教科である。例えば「3×5」という計算の方法はいくつかあるが、その正解は「15」と一つである。しかし、「なぜ江戸幕府は長く続いたのか？」という問いに対しては、「幕藩体制が確立した」「鎖国をしたことにより外国の影響を受けなかった」「身分をしっかり分けたことにより、民衆の統制に成功した」等、さまざまな要因が考えられる。この中のどれも正しいかもしれない。しかし、正解と言えるものはない。このように社会科で考える「問い」に対する「解」は多様である。そのため、社会科の授業が大きな役割を果たすことができる。多様な考えに触れることを繰り返すことで、自分とは異なる立場の考えも受け入れることができるようになると考える。このように多様性を受け入れ考える子どもの姿こそ「持続可能な社会の創り手」であると考える。

（２）「多様性を受け入れ考える子どもの姿」とは

教師が前に立ち、一部の子どもたちの発言で授業を進めるような従来の「教師主導」の授業では「多様性を認める」ことはできない。これから必要となるのは子どもたち自身が問いを持ち、解決するために調べ、調べた事を根拠にしながらその問いについて、他者との対話を通して、子ども自身が考えをもつ対話中心の授業である。その際、ただ調べたことを説明し合うことが対話ではなく、問いに対して、自分の考えを「具体化」したり「抽象化」したりということを繰り返すことが重要である。この作業を繰り返し行うことで、問題に対して子どもたちがただ調べるだけで終わるのではなく、調べたことを根拠にしながら他者との話し合いを通して考えることができるようになる。




その話し合いのパターンを３つのパターンに分類した。１つ目は１つの学習問題から多様な考え方が生まれるものの、最終的には、一つの正解へと導く「収束型」である。これは主に算数や理科といった教科の場面で多くあると考える。２つ目は１つの問題に対して、話し合えば話し合うほどに多様な考え方が広がっていく「拡散型」である。これは「正解」ではなく「解」を考える国語や社会の授業の中での話し合いの形となり得るものである。３つ目は、多様な考え方が広がるものの、折り合いをつけながら最終的には一つの考えに収束させる「拡散・収束型」である。特別活動の学級会等がそのパターンを代表するものと考える。どれか一つを重点的に取り組むのではなく、どれも必要であり、それぞれのパターンを使い分け継続することで、子ども自身が考える力を身に付けることができると考える。

他者との話し合いを通して考える力を身に付けることができれば、一つの問いに対して自分なりの解を出すだけに留まらず、新たな問いを見つけ、その解を見つけていくという、「考え続ける子どもの姿」が見られるようになる。

以上を踏まえ、視点①「問いを引き出す工夫」、視点②「考えを深めるための対話の工夫」、視点③「考えの変容を見取るための評価の工夫」の３つの研究の視点を持ち、「多様性を認め、考え続ける子どもの姿」を目指していきたい。

## 4　本年度の研究の視点

### （１）視点①　「問いを引き出す工夫」

学習問題に対して子どもたちが主体的に解決に取り組むための原動力は、子どもたち自身の「なぜ？」という「問い」である。ではどのようにしてその「問い」が生まれるのだろうか。それは子どもたちが何らかの「ずれ」を感じるときに、「なぜ？」と感じると考える。子どもたちの経験や既存の知識では説明できないような教材と出会うことができれば自然と「なぜ？」という「問い」が生まれるはずである。そのような教材の開発が必要であると考える。では、どのような教材がふさわしいのか、熊本県社会科研究会によると、以下のような「教材選定の基準」をより多くクリアできる教材を選定すればよいとしている。

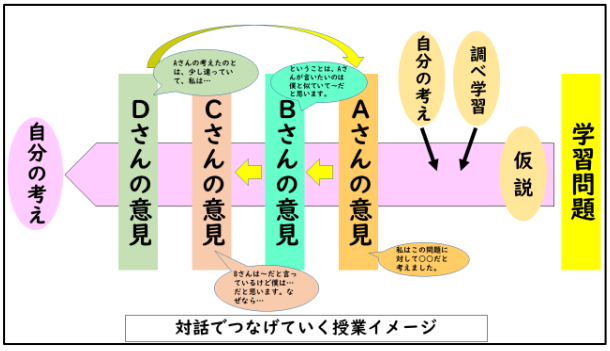
**教材選定の基準**

① 目標やねらいを達成できる【学習目標との関係】
② 学習者が日常生活で頻繁に触れていたり、今までの生活の中で印象に残っている情景や心象と重なっていたりする。【身近さ】
③ 学習者自身の現在や将来の損得に関わったり、こだわりと矛盾したりしており、学習者が解決への必要感を感じる。【解決への必要感】
④ 社会科学的な法則性や概念が内在しており、学習を通して学習者がそれらを発見していくことが想定できる。【一般化】
⑤ 社会的事象に多様性や有限性の関係が内在している。【持続可能性】

これらを受けて、本校では社会科そのものが遠いと感じる子どもたちのために【身近さ】、主体性を持って問題の解決に取り組むための【解決への必要感】の２項目に重点を置き、歴史ある本校の校区周辺に目を向け、本校の子どもたちにより身近である教材の開発を全職員で研究していく。

### （２）視点②　「考えを深めるための対話を促す工夫」

「考え続ける子ども」の姿を目指すためには、前述したように「具体化」と「抽象化」を繰り返すことが必要であると考える。具体化するためには「例えば～」、抽象化するためには「つまり～」「～ということは・・・」等の言葉で子どもたち自身が他の子どもたちの言葉をつないでいくことが必要である。また、子どもたちの発言は「私は○○だと思います。」のようなものではなく、「△△君が、～と言ったことに対して、私は○○だと思います。」のように、自分の主張だけではな



く、必ず他者の意見を踏まえたものにしたい。この意見は決して直前に出たものだけに対してではなく、それ以前の意見に対してでも構わない。こうすることで、他者を認め自分の考えを述べる力を身に付けることができる。授業のイメージとしては、学習問題に関する最初の子どもの意見に対して、「○○君の言っていることは、例えば～かな？」「△△さんが言う～ということは・・・だと思います。」といったつなぎ言葉を使い、クラス全体で対話を深め、子どもたち自身で考えをまとめていく授業である。そのような対話で子どもたち自身の考えを深める授業を展開していくために、以下のことに重点を置き、さらなる研究を深めていきたい。

| |
|---|
| ① 子どもたちの立場がわかるような挙手や指名の仕方の工夫 |
| ② クラスの友達の意見を踏まえ自分の発言ができるための工夫 |
| ③ つぶやきではなく、頷き等で反応する聞き手を育てるための工夫 |
| ④ 子どもたちの話し合いを止めずに、考えを可視化していくための板書の工夫 |
| ⑤ 話し合いをより効果的にするためのコーディネーターとしての教師の工夫 |

（３）視点③　「考えの変容を見取るための評価の工夫」

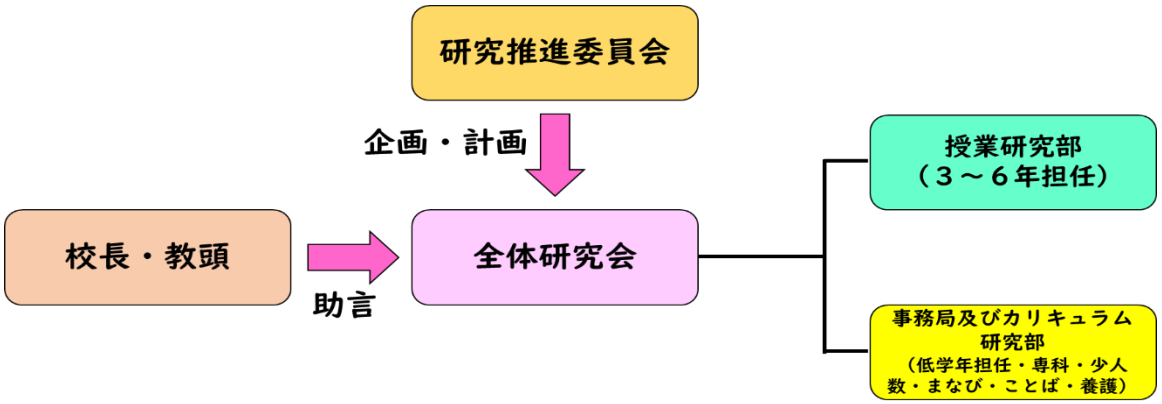
子どもたちが学習問題に対してどのような考えを持ち、その考えが対話を通してどのように変容したのかを見とるための評価が必要である。これはいわゆる「知識・理解」ではないため、記述や複数回答といった一般的な方法では評価できない。熊本県社会科研究会同様の着眼の下、子どもたちの考えの変容を見とるための方法を研究しており、以下の３つを取り上げている。

① 「根拠・理由・主張」の３点セットを意識したトゥールミンの論証モデルに基づく記述（三角ロジック）
② ウェビングマップ
③ 価値の明確化理論の活用

これらの方法を本校でも実践していき、我々教師はもちろん、子どもたち自身も考えの変容を見取ることができることを目指していきたい。

また、社会科の授業だけでなく、全ての教科において、その見方・考え方を生かしながら、教科横断的な指導も必要であり、それぞれに応じた適切な評価もしなければならない。そのためには、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の PDCA サイクルを確立することが重要であると考える。しかし、我々教師のこれまでを振り返ると、実践ばかり、つまり、PDCA の”Do”ばかりに重きを置いてきたように感じている。「何をどのようにして学び、どのような力を身に付けさせたいのか」という”Plan”の部分をより明確にする必要がある。そのためにもそれぞれの教科における話し合い（対話）のイメージを教師だけではなく、子どもたち自身も実感することが必要だと考える。このような PDCA サイクルを確立し、「今は何をしてどのような力を身に付けさせるのか」と教科横断的な視点に立った評価も行っていきたい。

## 5　研究の組織




校長・教頭の助言のもと、全体研究会で研究を進めていく。その際、研究推進委員会は、提案内容の企画・計画を行う。更に、社会科の授業を行う３～６年担任は、授業研究部に所属し、各学年での研究の視点に沿った社会科の授業実践を計画し実践を行う。事務局及びカリキュラム研究部では、授業研究会の在り方や、教育課程全体の見直しを進めていく。

## ６　研修計画

| 期日・内容 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | | | 13<br>火 | 教科部会 | 19<br>月 | （職員会議） | 23<br>金 | 校内研修１<br>今年度の研究について |
| 5 | | | 10<br>月 | 校内研修２<br>研究理論提案 | 17<br>月 | （職員会議） | 31<br>金 | 校内研修３<br>心肺蘇生法 |
| 6 | | | 14<br>月 | 校内研修４<br>カリキュラム・マネジメントについて | 21<br>月 | （職員会議） | 28<br>月 | 校内研修５<br>県社研の理論について① |
| 7 | 5<br>月 | 校内研修６<br>提案授業について（事前研） | 12<br>月 | 校内研修７<br>提案授業 | 21<br>水 | （職員会議） | 29<br>木 | 校内研修８<br>県社研の理論について② |
| 8 | 4<br>水 | 校内研修９<br>各学年による教材開発① | | | 20<br>金 | 校内研修10<br>人権教育レポート研修 | 25<br>水 | 校内研修11<br>各学年による教材開発② |
| 9 | 6<br>月 | 校内研修12<br>人権レポート代表者読み合わせ | 13<br>月 | （職員会議） | | | 27<br>月 | 校内研修13<br>研究授業①②の事前研（分科会） |
| 10 | | | | | 18<br>月 | （職員会議） | 25<br>月 | 校内研修14<br>研究授業① |
| 11 | 1<br>月 | 校内研修15<br>研究授業② | 8<br>月 | 校内研修 16<br>研究授業③④の事前研（分科会） | 15<br>月 | （職員会議） | 22<br>月 | 校内研修17<br>これまでの研究の振り返り① |
| | 29<br>月 | 校内研修18<br>人権教育研修 | | | | | | |
| 12 | 6<br>月 | （職員会議） | 13<br>月 | 校内研修19<br>特別支援教育研修 | | | 24<br>金 | （職員会議） |
| 1 | | | 17<br>月 | （職員会議） | 24<br>月 | 校内研修２０<br>次年度の授業内容検討会 | 31<br>月 | 校内研修２１<br>研究授業④<br>（指定校公開授業） |
| 2 | 7<br>月 | （職員会議） | 14<br>月 | 教科部会（反省）<br>個別の支援計画のまとめ | 21<br>月 | （職員会議） | 28<br>月 | 校内研修２２<br>これまでの研究の振り返り② |
| 3 | 7<br>月 | 校内研修24<br>反省と次年度への志向 | | | 24<br>水 | （職員会議） | | |

※　研究授業①②のいずれかは学びわくわく授業研（社会科）として行う。

※　研究授業③は学びわくわく授業研（一斉開催）のため、校内研修には位置づけない。